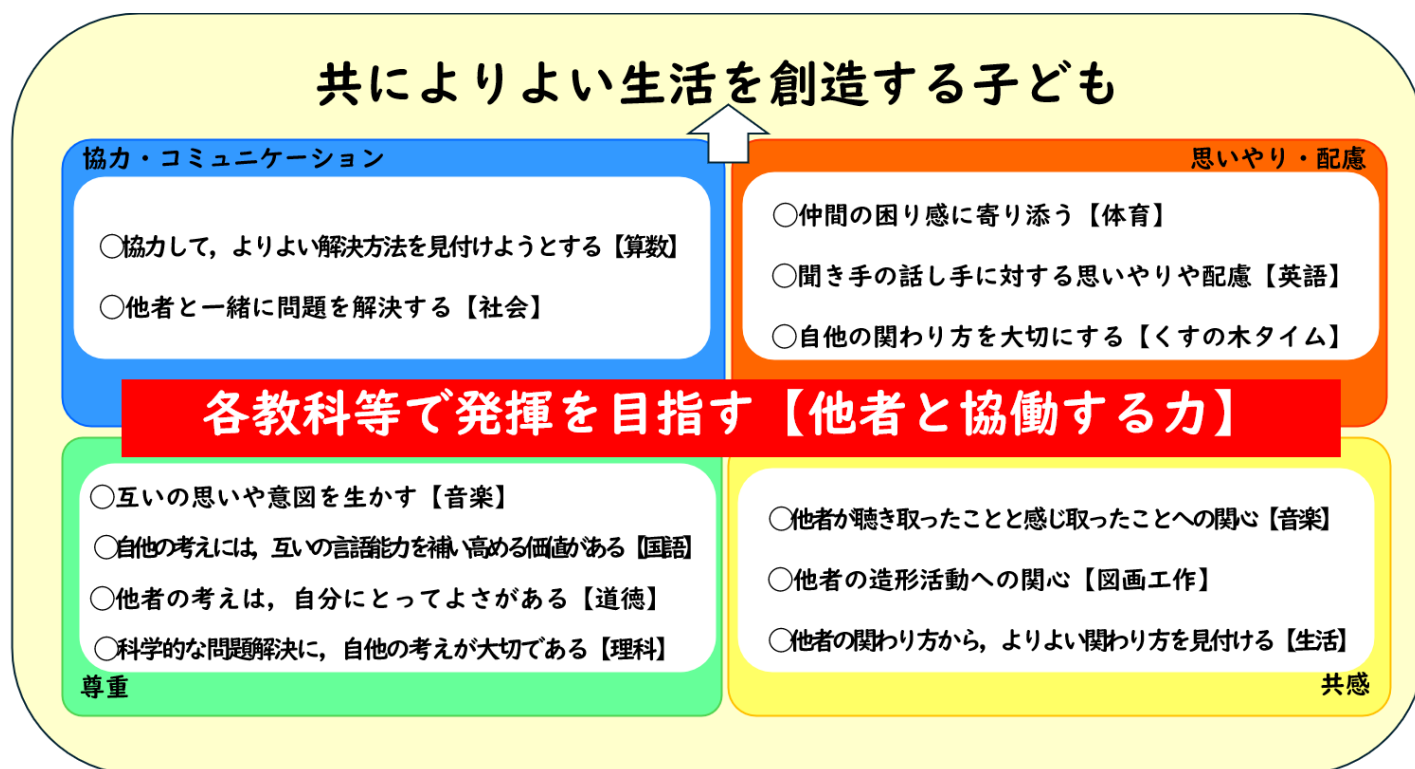


VII 研究のまとめ

研究主題「共によりよい生活を創造する子どもの育成」の下、2年次は副主題を「非認知能力『他者と協働する力』を発揮する学びのデザイン」とし、研究を進めてきた。(図6)



＜図6 各教科等の特性に応じた課題から導いた他者と協働する力＞

本研究の結果、以下のことが明らかとなった。

- 各教科等部が、見方・考え方を基に、教科本質的な学びを捉え、学習方略や協働的に学習することの意味を位置付けた「教科等を学ぶよさ」を子どもたちと共有した。また、子ども自身が各教科の学習に合わせて「教科等を学ぶよさ」を「見通し」「実行・振り返り」「次への目標」といった過程で、振り返り、次の学びにつなげることを繰り返した。その結果、子どもたちは、各教科等の学習方略や見方・考え方をを用いることができるようになり、教師も子どもも教科本質的な学びの実現へ向かって学びを進めることができた。
- 各教科等において、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に向けて、各教科等の特性に応じた困難さを基に「他者と協働する力」が発揮された姿を捉えた。そして、困難さから「他者と協働する力」が発揮されるまでの学びのプロセスを想定し、そのプロセスを基にした学びのデザインをし、実践した。その結果、各教科等部が行った学びのデザインによって、「他者と協働する力」を発揮した子どもの姿が現れたことから、プロセスを基にした学びのデザインは「他者と協働する力」を発揮する上で、有効であったことが明らかになった。
- 「他者と協働する力」を発揮する子どもたちからは、思いやりをもって、他者に寄り添ったり、他者の思いや考えを尊重したりしながら、納得解や最適解を導く姿が見られた。これは、「共によりよい生活の創造」という正解のない未知の状況の中で、自分のことだけではなく、他者や社会、自然などの幸せにも目を向けて、歩みを進めていくことにつながる姿であると考えられる。
- 本校では、他者と円滑にコミュニケーションをとることや他者を思いやること、他者に共感すること、多様な他者を価値のある存在として尊重すること、他者に配慮すること、他者と協力することなどを「他者と協働する力」として捉えた。また、各教科等部では、教科等の特性に応じた困難さから、大

切にしたい「他者と協働する力」を捉えた。各教科等の学びにおける「他者と協働する力」は、教科本質的な学びとの関わりの深さや困難さの解消によって変わっていく可能性があることが考えられる。「他者と協働する力」を発揮した子どもたちの姿を継続的に見とり、分析を行っていく必要がある。

○本校で継続的に行われている「共に分かるプロジェクト」を非認知能力の側面から改善し、月に1回教師と子どもが振り返りを行う機会を設けた。その結果、同一歩調で学習基盤を整え、継続的且つ組織的に日々の授業改善を行うことができ、「共に分かるプロジェクト」が、子どもの非認知能力の発揮に寄与したと考えられる。

○本校では、1年次に目標の達成に関わる非認知能力である「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮するための研究を行ってきた。2年次にあたる本年度は、「他者と協働する力」に着目した研究を行った。非認知能力は、互いに影響を合いながら育まれると考ええると、自分の感情に関わる「自信」や「自尊心」、「楽観性」、「レジリエンス」といった非認知能力にも着目して、研究を進める必要がある。

【参考文献】

- ・文部科学省（2017）『小学校学習指導要領』東洋館出版社。
- ・中央教育審議会（2021）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』。
- ・OECD、ベネッセ教育総合研究所企画制作、無藤隆・秋田喜代美監訳（2018）『社会情動的スキル 学びに向かう力』明石書店。
- ・白井俊（2020）『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』ミネルヴァ書房。
- ・奈須正裕（2020）『次代の学びを創る知恵とワザ』ぎょうせい。
- ・田村学（2018）『深い学び』東洋館出版社。
- ・中山芳一（2023）『教師のための「非認知能力」の育て方』明治図書。
- ・鹿毛雅治（2022）『モチベーションの心理学 「やる気」と「意欲」のメカニズム』中央公論新社。
- ・小塩信司ら（2021）『非認知能力 概念・測定と教育の可能性』北大路書房。